南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第14集

山梨県南アルプス市
Monomizuka Kohun

山梨県指定史跡　物見塚古墳

資料再整理・遺物選別作業調査報告書

2007. 10
南アルプス市教育委員会

MONOMIZUKA TUMULUS ARCHAEOLOGICAL INVESTIGATION REPORT

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第14集

山梨県南アルプス市

Monomizuka Kohun

山梨県指定史跡　物見塚古墳

資料再整理・遺物選別作業調査報告書

２００７．10

南アルプス市教育委員会

MONOMIZUKA TUMULUS ARCHAEOLOGICAL INVESTIGATION REPORT

例　言

1　本書は、山梨県南アルプス市下市之瀬954番地1ほかに所在する山梨県指定史跡「物見塚古墳」の資料再整理・遺物選別作業調査報告書である。

2　調査は、昭和55～56年にかけて行なわれた同古墳の確認調査の際出土した、遺物の再整理、および発生土の選別・遺物検出作業を目的とした学術調査である。

3　調査は、平成17年10月19日から同年12月20日および平成18年10月20日から翌19年3月1日にかけて行ない、現地における実質調査日数は、58.5日であった。

4　調査範囲は、昭和56年の調査の際に設置された、後円部頂のトレンチとした。実質掘削面積は、26.6平米となった。

5　調査は、南アルプス市教育委員会が主体となって行ない、田中大輔（南アルプス市教育委員会文化財課文化財担当）が担当した。

6　調査に従事したのは以下の方々である。

飯室めぐみ・市ノ瀬政次・加藤由利子
神田久美子・久保田幸恵・小林　素子
斉藤　重信・桜井　理恵・中澤　健二
中澤　保・名取　茂・野沢まゆみ
広瀬　源春・古郡　明・穂坂美佐子
矢崎　達明・山路　宏美・山村　隼人
山本　愛（敬称略・50音順）

また、若草中学校職場体験として、深沢祐太が1日参加した。

7　整理作業及び報告書刊行作業は、平成19年度に実施し、編集・執筆は田中が行なった。

8　本書に掲載した地図は、国土地理院発行2万5千分の1「小笠原」、南アルプス市発行1万分の1「南アルプス市地形図1」である。

9　発掘調査・整理作業に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

石神　孝子・小林　健二・長沼　庚三
新津　健・松浦宥一郎・宮澤　公雄
山下　孝司・山梨県教育委員会学術文化財課
山梨県埋蔵文化財センター（敬称略・50音順）

10　本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

凡　例

遺構凡例

1　調査区平面図の縮尺は、1/80とした。

2　挿図中の北方位はすべて国家座標に基づく座標北である。磁北は6°　10′西偏する。

遺物凡例

1　遺物実測図の縮尺は等倍で示した。

2　遺物写真の縮尺は統一していない。

3　遺物の掲載に際しては三角投影法に準拠した図を示した。

4　遺物観察表において、計測値の単位は、鉄製品・土器についてはセンチメートル、玉類についてはミリメートルである。なお、鉄製品・土器の最小計測単位は1.0mm、玉類の計測値については、計測機器の性能の制約から、最小計測単位は0.05mmである。遺物観察表中括弧で示した値は、残存する最大値である。

5　遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』に準拠して付与した。

6　挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

7　検出した玉類については、いずれも脆弱であったため、整理作業の過程で、すべてエチレン酢酸ビニールエマルジョン系樹脂溶液（商品名ナチュラルコートNW－1：有限会社新成田総合社）に含浸させ強化して作業を行なった。

目　次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 ―― 1

第Ⅱ章　遺跡の概観 ―― 5

第Ⅲ章　検出された遺物 ―― 7

第Ⅳ章　総括 ―― 11

参考引用文献

図版

報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　遺跡の位置 ―― 1
第２図　調査区平面図 ―― 4
第３図　遺跡の立地 ―― 6
第４図　出土遺物 ―― 8
第５図　『西郡地方誌』に
　　掲載された鏡と玉類 ―― 9

表目次

第１表　出土遺物観察表（鉄製品）―― 9
第２表　出土遺物観察表（土　器）―― 9
第３表　出土遺物観察表（玉　類）―― 10

図版目次

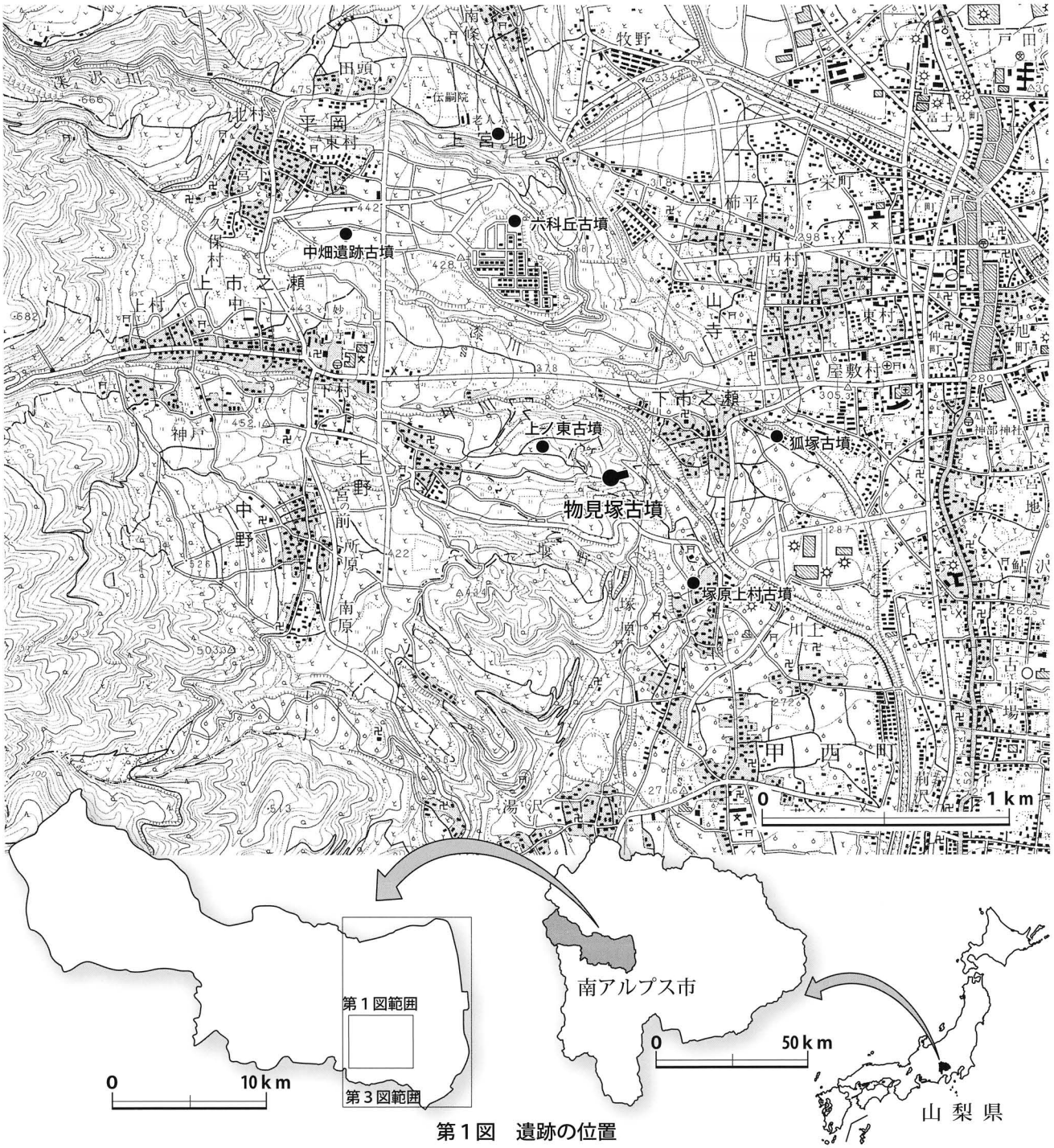
図版１　古墳全景　：後円部より
　　：前方部より後円部をのぞむ
図版２　平成17年度：昭和56年調査時土壌封入土嚢遺存確認状況
　　土壌採取作業状況
　　遺物選別作業状況
　　土壌採取終了状況
　　土嚢充填（埋戻し）状況
　　調査終了状況
図版３　平成18年度：土壌採取作業状況
　　遺物選別作業状況
　　土壌採取終了状況
　　土嚢充填（埋戻し）状況
　　調査終了状況
図版４　古墳全景　：東より
　　出土遺物　：鉄製品・土器
図版５　出土遺物　：玉類

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

予てから、その存在が知られていた物見塚古墳については、昭和 55 年１月、旧櫛形町教育委員会 (現南アルプス市) が主体となって墳丘の測量調査を実施し、前方後円墳である可能性が示された。引き続き、昭和 56 年３月から同年４月にかけて、同町教育委員会によって古墳の保存をはかるため、その環境整備資料を得ることを目的として学術発掘調査が行われている。その後物見塚古墳は同年６月１日町指定、続く昭和 63 年 11 月 16 日には、釜無川（富士川）西岸地域唯一の前方後円墳として県指定史跡となっている（史第 16 号）。

この物見塚古墳の昭和 56 年の確認調査の際に、後円部頂において埋葬主体部検出を目指して設定さ



第１図　遺跡の位置

れた試掘坑からの発生土の一部については、時間および予算的制約から詳細な選別作業を行わず、調査終了後土嚢袋に充填の上、埋め戻され、後の調査に託された。

その後、土嚢袋の回収および土壌の選別作業については、時期を逸し、この遺跡の史跡整備事業についても進展が図れない間、古墳は風雪により構築土の崩落・流出が目立つようになり、平成16年度には、崩落の著しい後円部の墳丘を留める応急措置として、県の補助を得て、後円部周縁に砂を充填した土嚢を巡らす措置を実施するに至った。

このような中、物見塚古墳の重要性を、広く市内外の方々に知っていただく手段として、この度これら昭和56年時の土嚢袋を回収し、土壌の選別分析を実施し、この成果を広く提示することとした。

第2節　調査の方法と経過

1　調査の方法

調査に際して、後円部に遺された土嚢袋については、既に周辺土壌と一体となり、形骸をとどめていない可能性が高いものと推察された。そこで、まず後円部頂の主体部に対し設定された試掘坑の埋土を、土嚢を含め、地山や墳丘構築土を痛めないように人力で精査しながら除去し、回収した土嚢袋を含む土壌は、現地で選別作業（篩がけ）を行い、資料の検出等に努めることとした。その後、作業を終了した土壌は順次埋戻し現状を復旧することとした。また、この際新たに遺構を掘削しないよう、地山・墳丘構築土をよく見極め、作業には細心の注意をはらうこととした。

実際の調査では、まず、昭和56年に設定された後円部頂の調査区のプランを確認するため、後円部頂の上面を精査した。しかしながらプランを明確にしえなかったため、想定されるプランの内側を縦横断するように十字形のトレンチを設定し、昭和56年調査区の調査区壁の検出および土嚢の状況確認を図った。その結果、トレンチの各端部で昭和56年調査区の調査区壁および遺構確認面を検出することができた。しかしながら当時の土嚢袋は、やはりわずかな繊維の痕跡を残して、ほぼ土に還っていることが看取された。そこで土嚢袋の回収に際しては、発掘調査の如く、人力にて精査しつつ調査区内の土壌を掘削する方法をとらざるをえなかった。

また、当初、土嚢袋の繊維の遺存濃度の高い部分を中心に土壌を回収し、篩により選別を行うこととしたが、出土遺物の濃度と繊維の遺存濃度は必ずしもリンクせず、遺物の検出はトレンチ全域からみられた。そのため、昭和56年の後円部頂の調査区の埋設土すべてを無差別に篩い、選別する方針とした。

土嚢袋の回収に際しては、第2図に提示したとおり、前述の十文字に設定したトレンチによって4分された昭和56年の調査区に対し、概ねその南西1/4及び北東1/4を平成17年度の、残りを平成18年度の調査対象範囲とした。また深度的には昭和56年の調査区の遺構確認面より下の部分＝サブトレンチや盗掘坑部分は原則として今回の調査の対象外とした。

土壌の選別作業は、作業効率を考慮し現地で実施した。作業には篩を用いたが、篩は7mmの網目、5mmの網目の2種を用い、選別作業は2段階に分けて行った。選別の終わった残土は最終的に再び新たな土嚢袋に充填し調査区に戻した。直接土壌での埋め戻しを行わず、土嚢袋に充填して埋め戻したのは、近い将来実施されるであろう古墳の保存整備事業に伴う確認調査の際の便を考慮してのことである。

なお、今回の事業について、平成17年度は、文化庁の補助金、保存活用整備事業（埋蔵文化財の保存活用のための整理等事業）を活用した。また、平成18年度及び本報告書刊行に係る平成19年度については、文化庁の指導のもと、山梨県教育委員会との協議により、文化庁国宝重要文化財等保存整備費補助金（遺跡詳細分布調査）及び山梨県文化財保存事業費補助金を活用した。

2　調査の経過

（1）平成 17 年度

調査は、平成 17 年 10 月 19 日から 12 月 20 日にかけて、途中中断を含みながら断続的に実施し、実質調査日数は 32.5 日であった。調査に伴う事務手続きおよび調査日誌抄については以下に掲げた。

事務手続：平成 17 年 9 月 13 日、南アルプス市長から山梨県教育委員会に史跡の現状変更申請（南ア総第 9-11 号）。同日、南アルプス市教育委員会教育長から県教育委員会に同申請書を進達（南ア教文第 9-8 号）。9 月 21 日、山梨県教育委員会から史跡の現状変更許可（山梨県教育委員会指令教学文第 1504 号）。12 月 21 日、南アルプス市教育委員会教育長から南アルプス警察署長に遺物発見届（南ア教文第 12-14 号）。

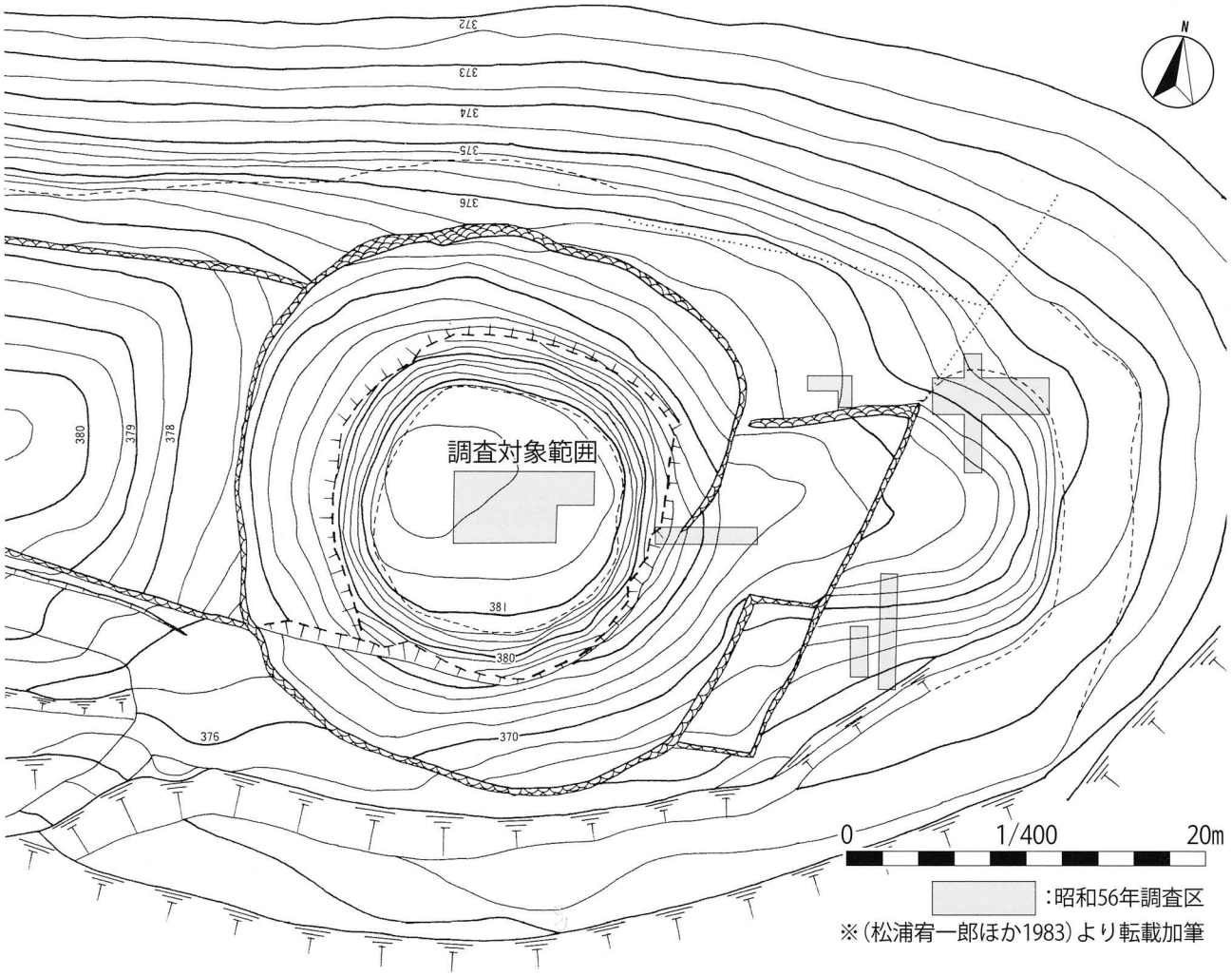
調査日誌抄：平成 17 年 10 月 19 日（水）　機材搬入等。後円部頂の下草刈と腐葉土の除去。10 月 20 日（木）下草刈と腐葉土の除去続行。昭和 56 年（以下 S 56）調査時の主体部トレンチのプラン確認作業。若草中学校職場体験受入。深沢祐太君一日作業を共にする。10 月 21 日（金）S 56 主体部調査区のプランが判然としないため、S 56 調査区の想定設定範囲の内側を十文字に切るように新たにトレンチを設定、掘削開始。S 56 調査時の土嚢袋はわずかに残るビニール繊維にその痕跡を残すのみで、形骸をとどめない。また、土嚢袋個々単位も確認できない。この部分から土壌の回収（掘削）作業開始。トレンチ内から臼玉 2 点、鉄製品片 1 点を検出。10 月 24 日（月）トレンチ内の土壌の回収続行。平行して土壌の篩による選別作業を開始。十文字に入れたトレンチの南端で S 56 調査区の調査区壁と調査区底面を確認。10 月 25 日（火）～ 11 月 15 日（火）土壌の回収作業および土壌選別作業。管玉 1 点、臼玉 3 点、鉄製品 4 点を検出。11 月 16 日（水）土壌の回収作業および土壌選別作業。帝京大学山梨文化財研究所宮澤公雄氏来跡。ご教示頂く。鉄製品片 1 点検出。11 月 17 日（木）平成 17 年度予定分の全土壌の回収を終了。調査区全景写真撮影。調査状況を平板測量によって縮尺 1/40 で作図。平行して土壌選別作業続行。11 月 18 日（金）～ 12 月 7 日（水）土壌選別作業。平行して選別済の土壌を再び土嚢に充填して埋戻し作業。臼玉 7 点、管玉 1 点、鉄製品片 6 点を検出。この後、他事業執行のため一時中断。12 月 20 日（火）　埋戻し作業。および機材撤収作業。

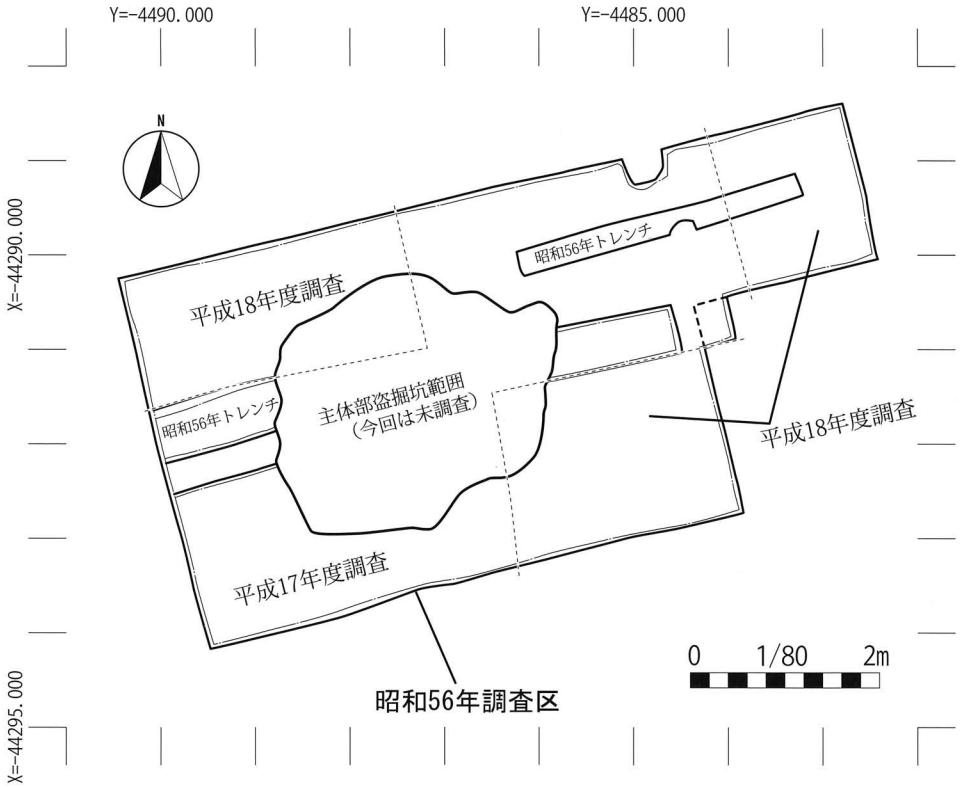
（2）平成 18 年度

調査は、10 月 20 日から翌平成 19 年 3 月 1 日にかけて、途中中断を含みながら断続的に実施し、実質調査日数は 26.0 日であった。調査に伴う事務手続きおよび調査日誌抄については以下に掲げた。

事務手続：平成 18 年 10 月 6 日、南アルプス市長から山梨県教育委員会に史跡の現状変更申請（南ア総 10-6 号）。同日、南アルプス市教育委員会教育長から県教育委員会に同申請書を進達（南ア教文第 10-5 号）。平成 18 年 10 月 18 日、山梨県教育委員会から史跡の現状変更許可（山梨県教育委員会指令教学文 1956 号）。平成 19 年 3 月 6 日、南アルプス市教育委員会教育長から南アルプス警察署長に遺物発見届（南ア教文第 3-2 号）。

調査日誌抄：10 月 20 日（金）機材搬入。調査区設定後、土壌の回収（掘削）開始。並行して遺物選別作業を行う。10 月 23 日（月）～ 11 月 2 日（木）遺物選別作業。臼玉 3 点、土器片 1 片、鉄製品 1 点を検出。11 月 3 日（金）～ 7 日（火）他事業執行のため調査を一時中断。11 月 8 日(水)～ 27 日(月)遺物選別作業。鉄製品 1 点を検出。11 月 28 日(火)～ 29 日（水）調査の一時中断のための埋戻し。機材一時撤収。平成 19 年 2 月 21 日（水）作業再開。残る部分の掘削。遺物選別作業。2 月 22 日（木）～ 28 日（水）遺物選別作業。臼玉 2 点を検出。3 月 1 日（木）　遺物選別作業終了。埋戻し作業を完了し全調査日程を終了。


N
372
373
374
375
376
380
379
378
調査対象範囲
381
380
376
370
0
1/400
20m
：昭和56年調査区
※（松浦宥一郎ほか1983）より転載加筆


Y=-4490.000
Y=-4485.000
X=-44290.000
X=-44295.000
N
平成18年度調査
昭和56年トレンチ
昭和56年トレンチ
主体部盗掘坑範囲
（今回は未調査）
平成18年度調査
平成17年度調査
0
1/80
2m
昭和56年調査区

第２図　調査区平面図

第Ⅱ章　遺跡の概観

物見塚古墳は、山梨県南アルプス市下市之瀬954番地1ほか3筆に所在し、釜無川（富士川）西岸地域に現存する唯一の前方後円墳として知られる。

墳丘は、明治以降、（一説にはアジア太平洋戦争中乃至終戦直後に）開墾により改変され、また、昭和54年頃、農道の建設に伴い後円部の一部が削平されているが、測量調査の結果、主軸をN―80°―Eにとり、現状でその規模は、全長46m、後円部径約30m、前方部長16m、同幅約14m、後円部の高さ4.2m、前方部の高さ1.5m程を測る。

度重なる盗掘を受けており、確認調査では主体部施設は明らかにできなかったものの、石室に用いられた石材は検出されず、埋葬施設として粘土槨が指摘されている。また、葺石が墳丘全面に配されたものと推察されたが、周溝、埴輪等の検出は見られなかった（松浦ほか1983）。

古墳は、甲府盆地の西縁に位置する市之瀬台地上に占地する。市之瀬台地は、深沢川、漆川、市之瀬川（坪川）、堰野川、秋山川など幾筋もの小河川の浸食を受け、分断され、放射状に独立した舌状台地の集合体を呈する。古墳は、この内、市之瀬川（坪川）と堰野川に画された舌状台地の先端部に構築される。

古墳の標高は後円部頂で約382m。甲府盆地底面との比高は120m程になり、はるか東方には釜無、笛吹の両河を挟み山梨県内最大の古墳である銚子塚古墳を擁する東山古墳群に対峙する。

市之瀬台地上には、旧石器時代にはじまり、縄文時代以降の多くの遺跡が分布し、六科丘遺跡や長田口遺跡、中畑遺跡などで、弥生時代後期から古墳時代前期の集落址が発見されている。また、物見塚と同じ舌状台地上に占地する上ノ東古墳や、谷を隔て北の台地上に占地する六科丘古墳、長田口・中畑遺跡で発見された低墳丘古墳など、いずれも物見塚に後出するいくつかの古墳の分布が見られる。

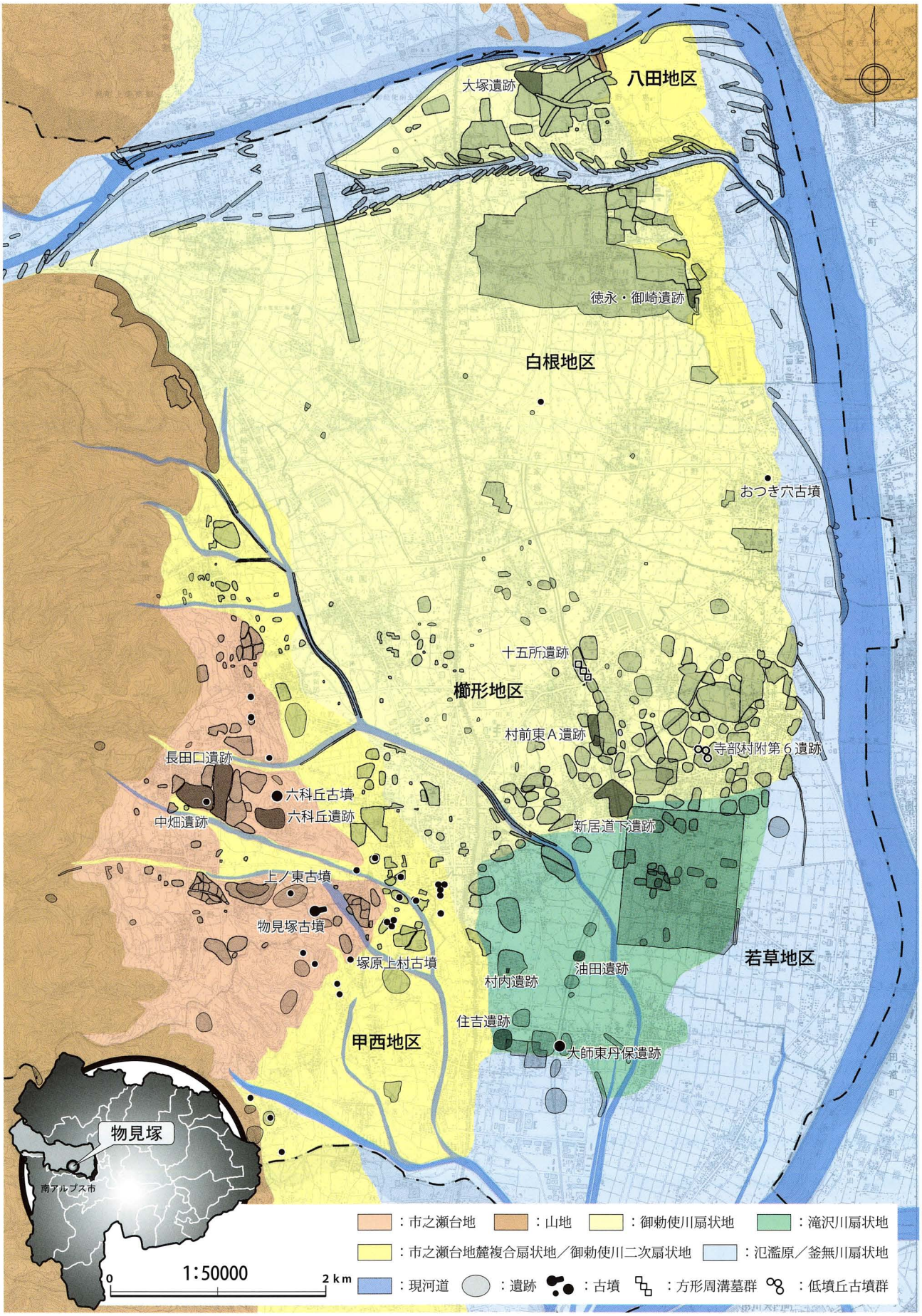
市之瀬台地を流下した河川は、複雑な複合扇状地を形成し、これら河川の営為によって作られた緩斜面には、現在は、塚原上村古墳や狐塚古墳など、いくつかを残しその多くは消滅してしまっているものの、かつて後期古墳の濃密な分布がみられ、「塚原」の大字にその名残を残す。

これら市之瀬台地麓扇状地群及び西側に位置する滝沢川扇状地は、北側から迫る御勅使川の大扇状地とせめぎ合い、これら扇状地が到達し得なかった盆地底面には釜無川の氾濫原が広がっている。

御勅使川扇状地の末端部には、その湧水線に沿って弧状に濃密な埋蔵文化財包蔵地帯が確認されている。ここでは、村前東A遺跡を中心として、古墳時代前期の集落址が濃密に分布するほか、新居道下遺跡から古墳時代後期の集落址が検出され、十五所遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓群、寺部村附第6遺跡では、古墳時代中期の低墳丘古墳群が発見されるなど、弥生から古墳時代を通じて濃密に人間の営為の痕跡を見ることができる。

また、御勅使川扇状地に南接し、より低位に位置する滝沢川扇状地は、湧水に恵まれ、住吉遺跡、油田遺跡などに見られるように、弥生時代中期以降集落や水田耕作地帯として発展してきた。

扇状地末端の微高地上では、大師東丹保遺跡において、現在の水田の下から、径36m程の円墳と推定される古墳が、壺形埴輪を伴って発見され、その立地と物見塚古墳に先行するとみられる年代観から注目される。また、滝沢川扇状地は、村内遺跡に見られるとおり、古墳時代中期の遺構・遺物が濃密に分布することでも知られ、扇状地上には微高地を中心として広く条里型の地割が遺存し、のちの律令国家における「大井郷」、更には、古代末の甲斐源氏「加賀美氏」の定着の礎を見ることができる。


八田地区
大塚遺跡
徳永・御崎遺跡
白根地区
おつき穴古墳
十五所遺跡
櫛形地区
村前東Ａ遺跡
寺部村附第６遺跡
長田口遺跡
六科丘古墳
六科丘遺跡
中畑遺跡
新居道下遺跡
上ノ東古墳
物見塚古墳
塚原上村古墳
若草地区
油田遺跡
村内遺跡
住吉遺跡
甲西地区
大師東丹保遺跡
物見塚
南アルプス市
0
1:50000
2 km
：市之瀬台地
：山地
：御勅使川扇状地
：滝沢川扇状地
：市之瀬台地麓複合扇状地／御勅使川二次扇状地
：氾濫原／釜無川扇状地
：現河道
：遺跡
：古墳
：方形周溝墓群
：低墳丘古墳群

第３図　遺跡の立地

第Ⅲ章　検出された遺物

昭和56年の調査以前、物見塚古墳出土の遺物としては、『西郡地方誌』に写真が掲載された、青銅鏡（捩文鏡）と管玉少なくとも8点、丸玉1点、また、『西郡史話』などの記載から剣一口が出土したことが知られる。これらは、昭和11年の盗掘の際に出土したとされるが、現在その行方は知れない。

また昭和56年の調査の際は、剣3口、直刀1口、鉄釘1点、管玉6点（内破片2点）、臼玉1点が検出されている。

今回の調査の結果検出された遺物は、玉類19点（内臼玉17点、管玉2点）、鉄製品片14点、土器片1点であった。この数は、昭和56年の調査における検出数を大幅に上回るものとなった。

これらの内、小片のため実測し得なかった鉄片3点を除き第4図に示した。

また、今回の調査をまとめる中で、昭和56年調査時に出土した玉類について、改めて観察したところ、この時の発掘調査報告書（松浦ほか1983）挿図第25図に遺物番号2として掲載されている管玉と4と付号されたそれが接合することが判明した。また、小片のため実測図が掲載されず、第27図に写真のみ掲載された破片2点が各々接合することが明らかとなった。このような経緯もあり、第4図には昭和56年検出の玉類については改めてすべて再実測して掲載した（再掲の昭和56年検出遺物は第4図遺物番号30および33～36）。

鉄製品

鉄製品については、今回検出されたものはいずれも破片であり、その種別の判別に苦慮するものが大部分であった。また、これらについても、昭和56年検出の剣3口、直刀1口、鉄釘1点との接合を試みたが接合する破片は見られなかった。

1は先端が尖り、断面が片刃に見受けられる。直刀の切先部分であろうか。刀幅は、2.6ｃｍほどで、昭和56年調査時に直刀とされた遺物の刀幅に概ね一致する。断面が片刃となるが、鎬の有無は確認できない。2は鏃のようにも見受けられるが判然としない。3は、鏃乃至刀子の先端部と推察される。4・9は断面菱形を呈し剣の一部と推察される。5・8は昭和56年検出の直刀の茎部分に酷似し、8には目釘孔が見られる。6は鏃乃至刀子と推察されるが判然としない。7は剣乃至刀の関部分にも見受けられるが判然としない。10は不明。11は剣乃至刀の茎部にも見受けられるが判然としない。

土器

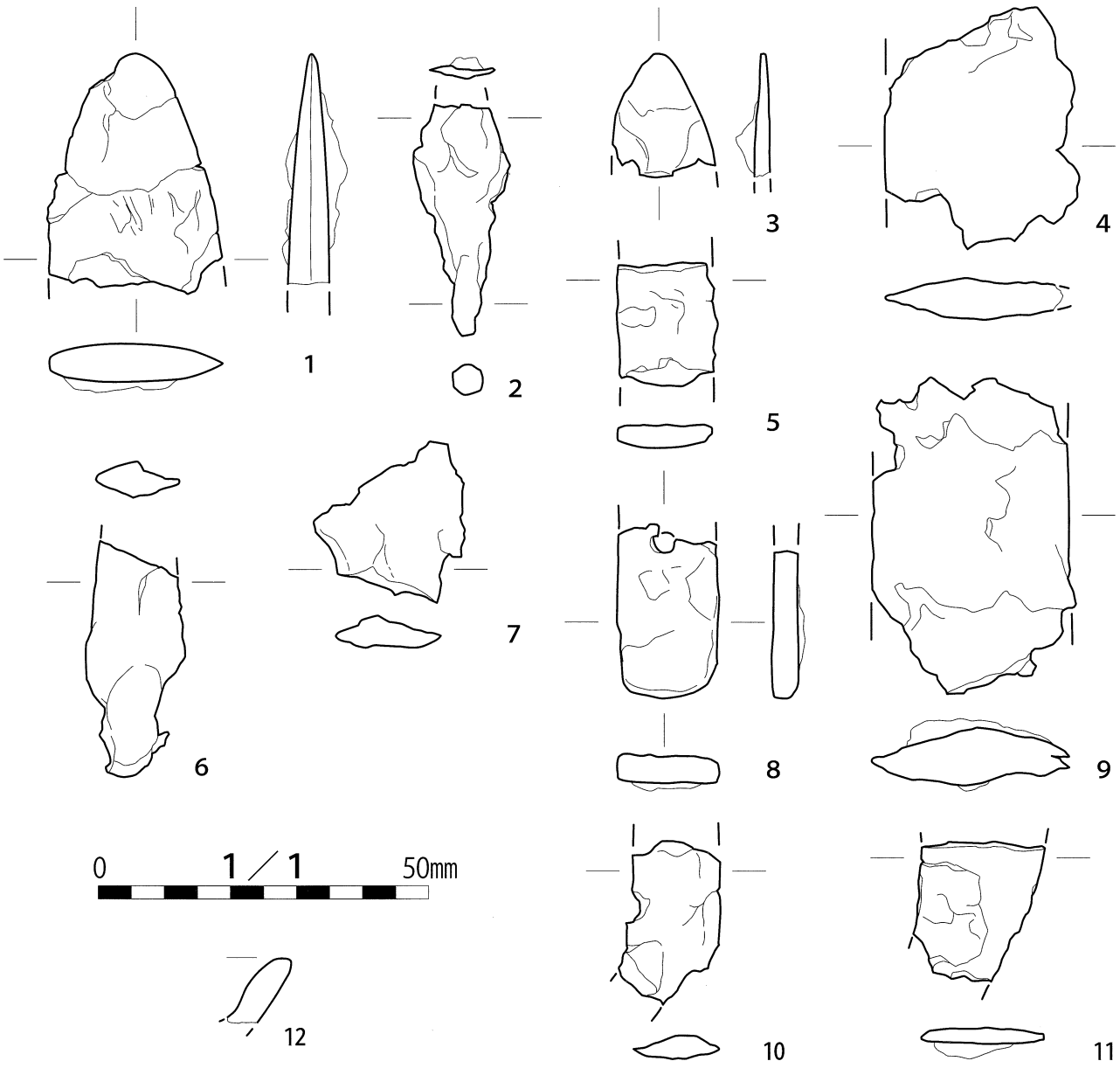
今回の調査では小片1点であるが土器片が検出された（第4図12）。土器の検出は、昭和56年の調査、それ以前の伝承等を通じて、今回が初めてである。胎土や形状から台付甕等、甕類の口縁部と推察されるがなお検討を要す。口縁部には、刻みがあるようにも見受けられるが遺物自体が脆弱であり、調整等も摩滅して観察しがたい。色調は灰黄褐色から黒褐色を呈し、口縁内面にはヨコナデによる窪みが見られる。また、口唇には面を有し、この口唇面には円周に沿って磨耗が見られる。

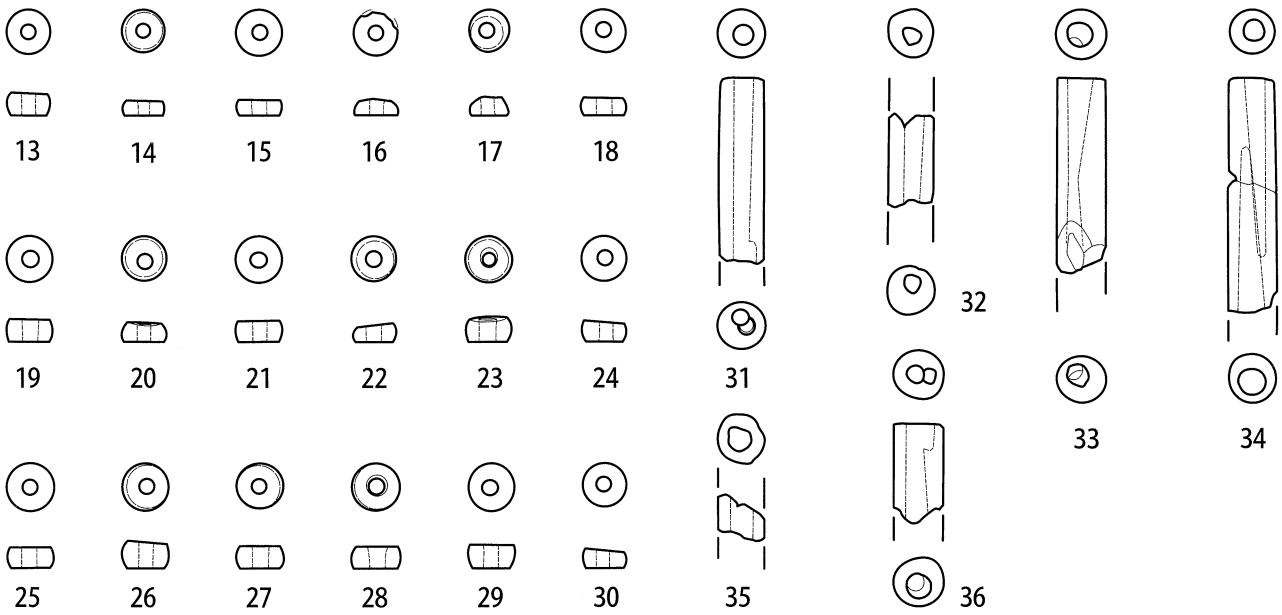
玉類

検出された玉類の内、17点は臼玉で（第4図13～29）、昭和56年に検出された1点（第4図30）をあわせてすべてが、やや軟質な緑色凝灰岩製であった。色調は概ねオリーブ灰色を呈する。

現存する合計18点の臼玉の平均径は5.98mm、平均孔径は1.93mm、平均最大厚2.99mm。標準偏差はそれぞれ、0.167、0.045、0.351となり、最大径及び孔径に強い規格性が認められるものの、厚さについてはかなり個体差があるといってよい。

基本的には概ね胴の張る臼型を呈するが、個体によってはソロバン玉状とまでは行かないが、研磨の過程で非常に不明瞭ながら稜を持つに至ったもの


1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1／1
50mm
10
11
12

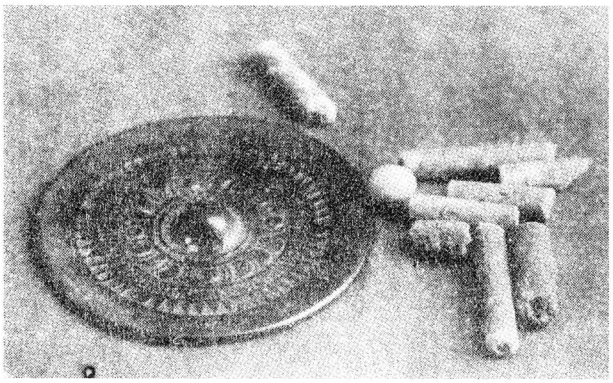

13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

第４図　出土遺物

などがみられる。また、基本的に上下端は、平滑に仕上げられるが、上面と下面で角度が異なる（左右で厚みの異なる）ものや、16・17のように片面が面をなさないものも見られる。

管玉については、今回検出されたものが２点、前回の調査で検出された６点が上記のとおり接合して４点となり、併せて６点が現存する。臼玉同様すべて緑色凝灰岩で作られるが、臼玉より相対的に軟質な石材が用いられ、いずれも表面が風化して荒れている。色調はすべて概ねオリーブ灰色を呈するが、一部に酸化鉄の付着が見られる。完存する資料はなく、すべてが一部乃至大部分を欠く。検出された管玉の最大長は30.60 mmで、平均径は6.28 mm、径の標準偏差は0.286。孔径の最大値は3.75 mm、最小値は1.20 mmであった。

管玉６点の内、穿孔方法が片面穿孔か両面穿孔かの判断が可能な４点については、すべて両面穿孔であった。孔の結合精度は低く、34のように穿孔方向が悪く途中で殆ど玉本体を突破してしまったものや、31・36のように穿孔の合致点において誤差の大きい、乃至両側からの穿孔でありながら、片側から穿孔が他端に達しているとも見られるものなどが見られる。なお、検出された管玉の観察から、穿孔具は円錐状を呈し、先端は丸みをおびてあまり鋭利でないことが看取される。



第５図　『西郡地方誌』に掲載された鏡と玉類
（山梨県立巨摩高等女学校編 1940 より）

第１表　出土遺物観察表（鉄製品）

遺物番号	種別	残存長	残存幅	残存厚	遺存率	備考
1	直刀	3.6	2.6	0.6	破片	
2	不明	3.5	1.5	0.5	破片	
3	刀子ないし鏃か	1.9	1.6	0.3	破片	
4	剣	3.7	2.9	0.7	破片	
5	直刀	1.9	1.5	0.4	破片	
6	不明	3.5	1.5	0.6	破片	
7	不明	2.5	2.3	0.5	破片	
8	直刀	2.7	1.5	0.4	破片	目釘孔あり
9	剣	4.8	3.0	0.9	破片	
10	不明	2.5	1.3	0.4	破片	
11	不明	2.0	1.9	0.2	破片	

第２表　出土遺物観察表（土器）

遺物番号	種別	器種	口径	底径	器高	色調		胎土	焼成	調整等	遺存率
12	土師器	台付甕か？	—	—	(1.9)	外側 10YR4/2	灰黄褐	緻密。砂粒、金色雲母む。	軟質	器壁の磨耗により不明。	破片
						内側 10YR3/2	黒褐				

第３表　出土遺物観察表（玉類）

遺物番号	種別	石材	最大径	孔径	最大厚 最大長	色調		硬度	穿孔方法	遺存率	備考 1983年の報告書における挿図番号ー遺物番号
13	臼玉	緑色凝灰岩	5.95	1.95	2.95	5GY7/1	明オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
14	臼玉	緑色凝灰岩	5.65	1.85	2.10	10GY6/1	緑灰	やや軟質	―	完存	
15	臼玉	緑色凝灰岩	6.10	2.00	2.40	10Y7/2	灰白	やや軟質	―	完存	
16	臼玉	緑色凝灰岩	6.00	1.95	2.10	7.5GY5/1	緑灰	やや軟質	―	一部欠	
17	臼玉	緑色凝灰岩	5.40	2.00	2.50	5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
18	臼玉	緑色凝灰岩	6.05	2.00	2.65	2.5GY8/1	灰白	やや軟質	―	完存	
19	臼玉	緑色凝灰岩	6.10	2.00	2.90	2.5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
20	臼玉	緑色凝灰岩	5.90	2.00	2.50	5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
21	臼玉	緑色凝灰岩	6.10	2.00	2.90	2.5GY7/1	明オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
22	臼玉	緑色凝灰岩	5.95	2.10	2.20	5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
23	臼玉	緑色凝灰岩	6.00	2.20	3.55	5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
24	臼玉	緑色凝灰岩	5.95	2.00	2.50	10Y7/2	灰白	やや軟質	―	完存	
25	臼玉	緑色凝灰岩	6.30	2.00	2.70	5GY7/1	明オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
26	臼玉	緑色凝灰岩	6.10	2.00	3.50	2.5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
27	臼玉	緑色凝灰岩	5.95	1.95	3.30	5GY6/1	オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
28	臼玉	緑色凝灰岩	6.25	2.10	3.05	5GY7/1	明オリーブ灰	やや軟質	―	完存	
29	臼玉	緑色凝灰岩	6.05	2.00	3.20	2.5GY8/1	灰白	やや軟質	―	完存	
30	臼玉	緑色凝灰岩	6.00	1.95	2.75	2.5GY7/1	明オリーブ灰	やや軟質	―	完存	第25図ー5
31	管玉	緑色凝灰岩	6.20	2.00～2.65	(24.40)	2.5GY7/1	明オリーブ灰	軟質	両面	一部欠	
32	管玉	緑色凝灰岩	6.20	1.90～2.70	(12.45)	2.5GY7/1	明オリーブ灰	軟質	―	1/2未満	
33	管玉	緑色凝灰岩	6.40	～3.45	(26.00)	10Y7/2	灰白	軟質	両面	一部欠	第25図ー1
34	管玉	緑色凝灰岩	6.10	1.20～3.75	(30.60)	10GY8/1	明緑灰	軟質	両面	一部欠	第25図ー2、ー4が接合
35	管玉	緑色凝灰岩	6.80	2.80	(6.50)	5GY7/1	明オリーブ灰	軟質	―	破片	第27図破片2点が接合
36	管玉	緑色凝灰岩	6.45	1.90～3.45	(13.60)	5GY8/1	灰白	軟質	両面	1/2未満	第25図ー3

第Ⅳ章　総　　括

今回の調査は、あくまで昭和56年の確認調査時の発生土土嚢の回収作業およびその内容物の精査である。残土の処理（埋め戻し）の問題もあり、篩による選別作業を現地（古墳墳頂部）にて行わなければならず、したがって、ウォーターセパレーション方式等の手段も採れず作業効率が上がらなかった。また土嚢の遺存状態が予想以上に悪く、昭和56年調査時の主体部調査区覆土を端から精査することになったため、当初の予想以上の調査期間を要することとなった。

しかしながら、このような中、今回の調査では、管玉2点、臼玉17点と、特に玉類においては、昭和56年の調査における出土点数を大きく上回る遺物の検出を見ることができ、ここに提示することができた。この調査に一定の成果があったということができよう。

今回の調査では、種別を特定しがたい鉄製品片、後述する土器片を除き、これまで検出されていた以外の組成、素材、技法等を持つ遺物は検出されなかったが、今回の調査による遺物の獲得により、製作技法の傾向や、製品の規格等を統計的手法で検討する上で、単純にその検討の分母が大きくなったことには意義があったといえる。

また、今回は小片ながら土器片を検出した。土器はいうまでもなく考古学における年代決定の最大のメルクマールであるが、小片のため今のところ年代を絞り込むには至っていない。今後さらに検討を加えたい。

◆

昭和56年の調査から26年を経て、この間物見塚古墳の周辺では、多くの発掘調査が実施されて、古墳を取り巻く歴史的様相も大きく変化した。

平成2年には、分布調査により御勅使川扇状地末端の湧水線に沿って、弥生時代から中世にわたる遺跡が80ヶ所以上新たに発見され、その後行われた発掘調査では、十五所遺跡で弥生時代後期の方形周溝墓群、村前東A遺跡および周辺において、古墳時代前期の大規模な集落址が発見された。御勅使川扇状地南面に広がる滝沢川扇状地上には、予てから知られていた住吉遺跡などのほかに油田遺跡をはじめとする多くの水田址が発見され、弥生時代中期～後期の遺跡分布が確認されたほか、村内遺跡をはじめとして、古墳時代中期の集落址が濃密に分布することが明らかになった。また、滝沢川扇状地扇端の水田の下からは物見塚にやや先行すると見られる古墳が壷形埴輪を伴って発見された。さらに、御勅使川扇状地上の寺部村附第6遺跡からは、5世紀後半の低墳丘古墳群が発見され、新居道下遺跡周辺では古墳時代後期の集落址が確認されている。現在でも滝沢川扇状地上には、条里型地割が広く遺存し、その後の律令国家における「大井郷」を支えていくに足る村々の萌芽をみることができるようになっている。

◆

物見塚古墳の構築時期については、現状では、山梨県最大の古墳である甲斐銚子塚古墳に後出する4世紀末から5世紀初頭の年代が与えられている。

従来遺跡分布が相対的に希薄とされた釜無川（富士川）西岸地域において昨今明らかとなった古墳時代の萌芽、またその前後の遺跡群の展開は、砂礫の運搬により現在平坦に埋没している盆地底面が、古環境、文化的様相共にダイナミックな起伏に富んだものであったことを明示している。このような遺跡のあり方は、甲斐国において、前方後円墳の導入期における国内各地域の権力構造が単純ではなかった可能性をはらんでおり、また、それが主たるルートであったか否かは別にして、所謂左右口ルート以外にも富士川を介した文化交流を大いに想定しうる状

況にある。

釜無川（富士川）西岸地域唯一の前方後円墳である物見塚古墳の構築時期や、そのあり方については、今後ともさらに検討をすすめ、この古墳を甲斐国の成り立ち、さらには、甲斐国域とヤマト政権とのつながり、東国への浸潤過程の中にあらためて明確に位置づけていきたい。

◆

現在、山梨県内における甲府盆地南辺の古墳群において、天神山古墳など、甲斐銚子塚古墳に先行する前方後円墳のあり方について議論があり、県指定となっている三珠大塚古墳（市川三郷町）の出土遺物の研究と資料化が県内の研究者有志により進められているほか、亀甲塚古墳（笛吹市）出土の管玉について再検討が加えられる（石神 2006）など、その有り様を明らかにすべく検討、再検討の動きが活発化しつつある。物見塚古墳については、勿論今回の調査をもって多くを語ることは困難ではあるが、このような流れの中で、今後とも地道な調査を積み重ねていくことが必要となる。

◆

物見塚古墳の墳丘は、度重なる盗掘に加え、明治以降、開墾により改変され、また、農道建設に伴い後円部の一部を失っており、現状では当初の墳丘形態を必ずしも留めない。

また、近年、風雪により、構築土の崩落・流出が著しく、平成 16 年度には、崩落の著しい後円部の墳丘を留める応急的措置として、県の補助を得て、後円部周縁に砂を充填した土嚢を巡らす措置を行っている。

このような状態にある、地域の歴史を語る上で非常に重要な地位を占める物見塚古墳について、我々は今後の史跡整備を含め、よりよい形で次代に受け渡す努力を行わなければならない。現状に鑑みれば、遺跡の保全を図る意味でも、地域の皆様に南アルプス市のシンボルともいえるこの古墳にふれていただくためにも、市民の皆様の広汎な支持を得て、一日も早い物見塚古墳の保存整備が求められる。

今回の調査成果を提示することによって、市民の皆様がこの古墳を知り、少しでもその存在、必要性の有無について考えていただける契機となれば幸甚である。

参考引用文献

石神孝子 1994「古墳出土玉類の基礎的把握－甲府盆地を中心として－」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
石神孝子　2006「笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理」『研究紀要 22』山梨県埋蔵文化財センターほか
斎藤秀樹ほか 2006『市内遺跡詳細分布調査報告書』南アルプス市教育委員会
清水　博 1986「甲府盆地に於ける前期古墳の動向について」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会
清水　博 1997「山梨県の古墳時代研究の動向－甲府盆地を中心として－」『山梨県考古学協会誌』第８号　山梨県考古学協会
関根孝夫ほか 1985『六科丘遺跡』櫛形町教育委員会
田中大輔 1998『角力場第２遺跡』若草町教育委員会
中込松弥 1967『西郡史話』西郡史話刊行会
新津　健ほか 1981『住吉遺跡』甲西町教育委員会
広瀬和弘 1997『村内遺跡』甲西町教育委員会
保坂和博ほか 1993『長田口遺跡』山梨県教育委員会
保坂和博 1997a『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会
保坂和博 1997b『油田遺跡』山梨県教育委員会
保阪太一 2003「長田口遺跡・中畑遺跡」『山梨考古』第 91 号
松浦宥一郎ほか 1983『物見塚』櫛形町教育委員会・物見塚古墳環境整備調査委員会
三田村美彦ほか 1999『村前東Ａ遺跡』山梨県教育委員会
宮澤公雄 1994「甲斐曽根丘陵における古墳時代前半期の様相―東山・米倉山地域の再検討を通じて―」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
宮澤公雄 2000「峡西地域における古墳の一様相－物見塚古墳の評価を中心として－」『山梨県考古学協会誌』第 11 号　山梨県考古学協会
宮澤公雄ほか 2004a『寺部村附第６遺跡』南アルプス市教育委員会
宮澤公雄 2004b「第１節　古墳の出現」『山梨県史　通史編１　原始・古代』山梨県
山梨県立考古博物館 2006『甲府盆地から見たヤマト―甲斐銚子塚古墳出現の背景―』
山梨県立巨摩高等女学校編 1940『西郡地方誌』
吉岡弘樹 1987「上ノ東古墳地形測量調査の概要」『山梨県考古学協会誌』創刊号　山梨県考古学協会
米田明訓ほか 1994『新居道下遺跡』山梨県教育委員会
米田明訓ほか 1999『十五所遺跡』山梨県教育委員会
若草町編 1990『若草町誌』

古墳全景：後円部より

古墳全景：前方部より後円部をのぞむ

図版 2

平成17年度：昭和56年調査時土壌封入土嚢遺存確認状況

平成17年度：土壌採取作業状況

平成17年度：遺物選別作業状況

平成17年度：土壌採取終了状況

平成17年度：土嚢充填（埋戻し）状況

平成17年度：調査終了状況

平成18年度：土壌採取作業状況

平成18年度：遺物選別作業状況

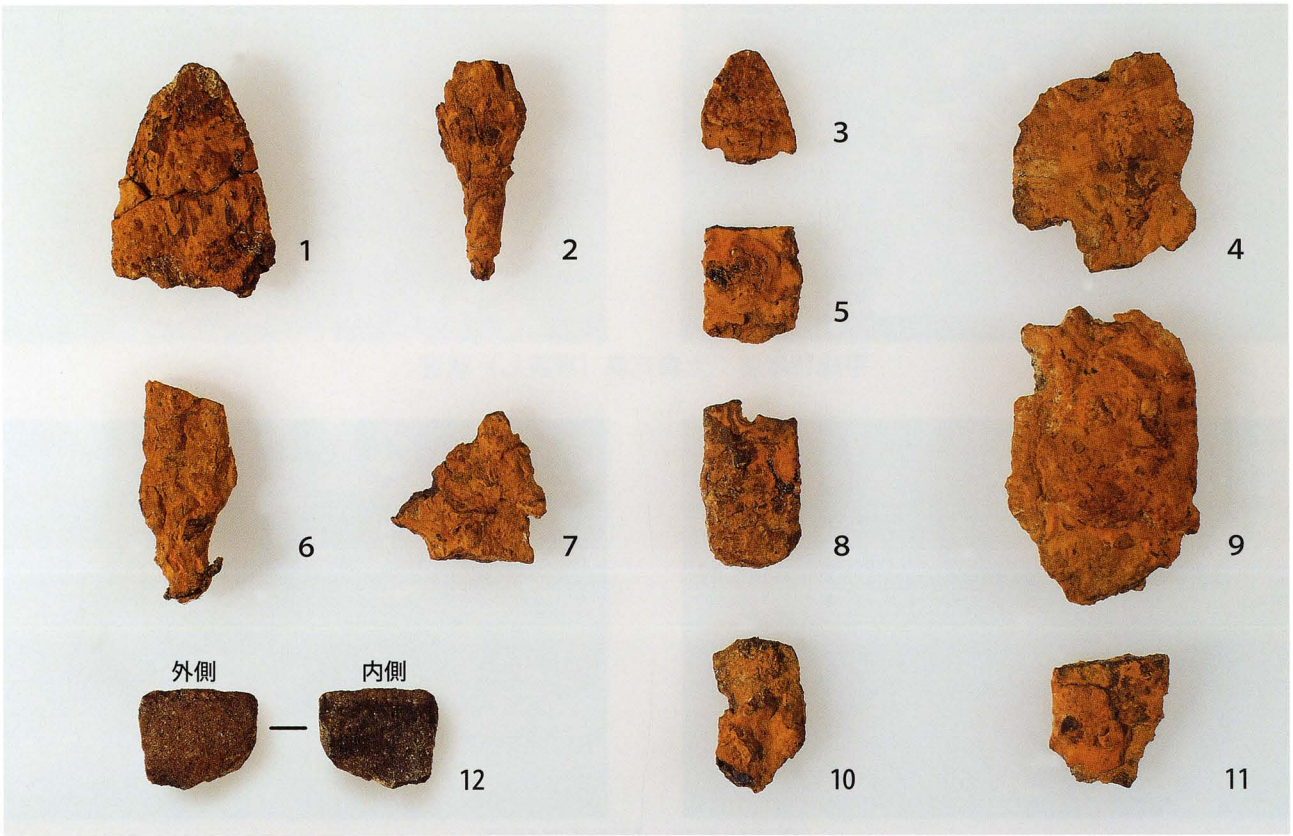
平成18年度：土壌採取終了状況（壁面の土嚢は平成17年度調査時の充填）

平成18年度：土嚢充填（埋戻し）状況

平成18年度：調査終了状況

図版 4

古墳全景：東より（手前が前方部、奥が後円部）



出土遺物：鉄製品・土器

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

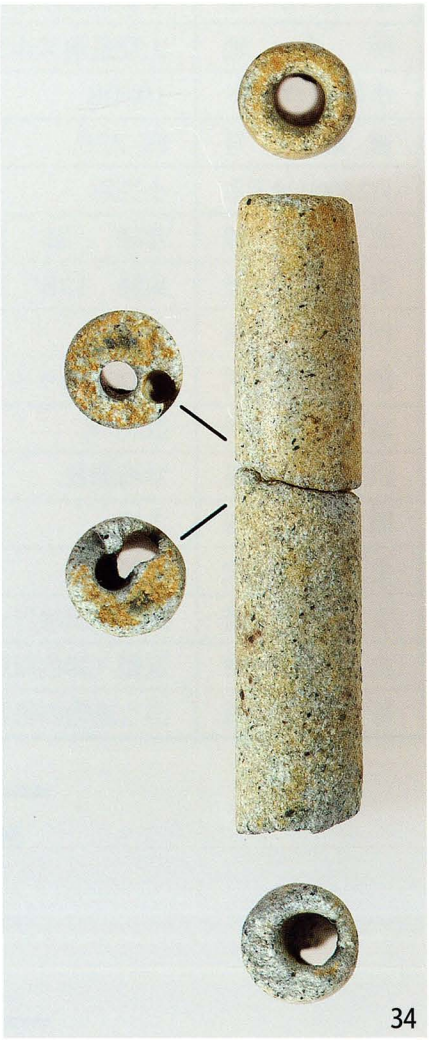
29

30

31

32

33


34

35

36

出土遺物：玉類

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんしていしせき　ものみづかこふん
書名	山梨県指定史跡　物見塚古墳
副書名	資料再整理・遺物選別作業調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400－0492　山梨県南アルプス市鮎沢1212　TEL055－282－7777
発行年月日	西暦2007年10月31日

ふりがな	やまなしけんしていしせき　ものみづかこふん
所収遺跡	山梨県指定史跡　物見塚古墳
ふりがな	やまなしけんみなみあるぷすししもいちのせ954-1
所在地	山梨県南アルプス市下市之瀬954-1
市町村コード	19208
遺跡番号	KG-226
1/25000地図名	小笠原
北緯	北緯　35°　36′　03″　(JGD2000)
東経	東経　138°　27′　01″　(JGD2000)
標高	382m
調査期間	20051019～20051220　／　20061020～20070301
調査面積	26.6㎡
調査原因	学術調査
種別	古墳
主な時代	古墳時代
主な遺構	遺構検出は行っていない
主な遺物	玉類（緑色凝灰岩製臼玉・管玉）　鉄製品（剣等）
特記事項	出土遺物の再整理・遺物選別作業調査事業

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第14集

山梨県指定史跡　物見塚古墳

―資料再整理・遺物選別作業調査報告書―

西暦2007年10月31日　発行

編集・発行　南アルプス市教育委員会
〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212
電話 055-282-7777

印刷　鬼灯書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原1233-5
電話 026-244-0210